

森 亮 太 さん

●医療法人 八事の森 杉浦医院 院長

病気を診るのではなく人を診るのが僕スタイル

杉浦医院院長の森亮太さんは、午前の診療が終わると、あわただしくに訪問診療に出発する。夕方の診療時間までの間、個人宅や老人ホームを回り、時には労災職業病に関する会議などもこなす。そんな熱血医師の森さんに、地域医療への思いを聞かせてもらった。

●聞き手……白井美樹（ライター）

訪問診療にもたつぷりと時間を費やす

「まったく休憩はとらないのですね。昼食は食べないのですか？」

森 糖質制限をしていることもありすが、時間がもつたいないので、昼はいつもサプリメントだけです。17時から夕方の診療が始まるので、その前になるべく多くの患者さんを訪問したいですからね。

「訪問診療では何名くらいの患者さんを診ているのですか。」

した。

でも、浪人2年目のときに、なんとしても医者になろうと思いを強くした、ある出会いがありました。

「どのような出会いだったのでしょうか？」

森 先輩に誘われて、笹島診療所というところに行き、炊き出しの医療相談にケースワーカーとして参加しました。炊き出しに

森 以前は自転車で訪問できる範囲で30名

ほどでしたが、最近は車でないと行けないような遠方の人もだんだん増えていきます。個人のお宅で60人くらい、老人ホームなどで80人くらいでしょうか。1人につき、月に2、3回は訪問しています。「先生じゃないとダメ」という高齢者も多くて、名古屋市の外れまで行くことも多いですね。

残りが短くなった人生を無機質な病院ではなく、家で過ごしたいと思うのは当然のことでしょう。少しでも、そういうご老人たちが、より良い人生を過ごす手助けができればと考えています。

やってくる日雇いや野宿の労働者に問診し、医師に引き継ぐのが私の役割でした。

当時、まだ医者の卵にもなっていない私ができることといえば、当事者たちに寄り添い、話を聞くことでした。それでも、彼らは私を頼り、「ありがとう」と感謝の言葉を掛けてくれたのです。その言葉に支えられ、なんとしても医師になって、自分にできることはなんでもやってあげたいという気持ちになりました。そして、無事に医学

亡き母との約束を守るため 医者を目指す

「医者を目指すようになったきっかけは？」

森 小学校3年生のときに、母が胃がんを患い、たったの数か月で亡くなりました。病床の母から「私のがんを治して」と言われたことが、大きく胸に残っていて、医者を目指したのです。

でも、医者になるまでの道のりは平坦ではなかったですね。あまり勉強しなかったこともありすが、なかなか医大に合格せず、予備校に通いながら浪人生活を続けま

部に入学・卒業ができたのです。

社会的弱者の支援に力を注いだ前院長の志を継ぐ

「杉浦医院の院長となられた経緯は？」

森 これも、笹島診療所で活動したことがきっかけとなりました。

大学卒業後、10年ほどは研修医、勤務医としてさまざまな経験をしていました。あるとき笹島診療所で出会った、杉浦医院前院長の杉浦裕先生に声を掛けられたのです。

地域医療に貢献し、ホームレスや外国人などを支援し続けてきた杉浦先生ですが、末期胃がんを患い、医院の後継者を探していました。ただ単に医院を継ぐだけでなく、ホームレス支援や労災者支援なども含めて

Profile

●もり・りょうた●

1970年生まれ。1998年、名古屋市立大学医学部卒業。淀川キリスト教病院で内科・小児科、救急、ホスピスでの緩和医療まで幅広く研修。名古屋市立東市民病院、国立療養所恵那病院、名古屋共立病院、第1なるみ病院を経て、2011年、杉浦医院院長、2012年、NPO法人ささしまサポートセンター理事長。





①杉浦医院での診察が終わり、訪問診療へ②95歳のおばあちゃん宅にて体温や血圧を計測③持ち運びできる胃カメラで検査④たばこを頑としてやめないおばあちゃん⑤名古屋労災職業病研究会の打ち合わせ⑥ささしまサポートセンターの生活・医療相談⑦屋外での診療の様子



⑦

先生の下で学べたことが現在の私の大きな財産となっています。訪問診療に関しても、杉浦先生がやってきたことを、私が引き継いだ形です。自宅での看取りを重視するという姿勢は、私もまったく同じだったので、喜んで引き継ぐことができました。

そして、先生が灯を燃やし続けてきた笹島診療所は、2012（平成24）年には「NPO法人ささしまサポートセンター」に生まれ変わり、現在では私が理事長を務めさせてもらっています。野宿を強いられている労働者、使い捨てにされている日雇い労働者の尊厳・生活・健康を取り戻すために支援をする姿勢は一貫して変わっていません。

引き継いでくれる人材を探していて、私に白羽の矢が立たったというわけです。

――支援活動も全て含めて引き継がれたのですね。

森 はい。声を掛けていただいたとき、先生は余命半年という宣告を受けていましたが、強い意志でそれから2年間を生き抜きました。その間、医院の経営や支援活動などについて、細部にわたって私に教えてくれました。先生は私のまさに恩師であり、

――今日は初めて炊き出しの現場に同行させていただきましたが、たくさんの方が集まっていましたね。

森 私が毎週木曜日に診療に訪れる高架下の炊き出し会場には、だいたい200人く

らいの人が集まっていますね。ホームレスというと、以前は「公園で汚い身なりで飲んだくれてる」といった悪いイメージがあったかもしれませんが、最近は、NPO法人がシャワーや洗濯機を貸す場所を設けたりしているので、身なりが汚れた人は少なくなっているように思います。

ボランティアが、健康に不安がある人の話を聴いて、問診をして、私のところに連れてくるのですが、人に迷惑を掛けるのを嫌がって病院から足が遠のいている人も多くいます。そういう人たちが、少しでも健康で暮らせるように、診察して薬を渡し、必要であれば病院の紹介状を書いたり、生活保護の申請を勧めたりしています。

患者さんの気持ちに沿い オーダーメイド医療を実施

――先生は『長寿大日本と「下流老人」』（幻冬舎メディアコンサルティング）という本を書かれていますよね。

森 私がこの著書を出す以前に、藤田孝典氏が書かれた『下流老人 一億総老後崩壊の衝撃』（朝日新聞出版）という本が出版され、世の中に大きな衝撃を与えました。

近い将来、高齢者の9割が生活保護レベルの収入で暮らす「下流老人」になるという内容です。

私は下流老人が増えている原因の一つは、高齢者が不要な高額医療を受けさせられているところにあるとみています。そこで、医者立場から、病院依存症になるのではなく、主体性を持って自分の健康を管理してほしいと思ったことが、執筆のきっかけです。

その反面、貧困高齢者の医療へのアクセスを保障できる施策も必要だと思います。住居が得られず、ひっそり死んでいくことに歯止めをかけないといけません。それには、医療従事者の役割が大切ですね。

――高齢者をドル箱としか考えないような病院があるのは問題ですね。

森 貧富の差によって提供される医療は異なっているといけないという心構えを、医師は身に付けているべきだと思います。

私は、これからの在宅医療を担う愛知県内の4つの医科大学から、年間約10人の学生を実習生として受け入れ、ホームレスの診療や貧困高齢者たちの在宅医療の現場を

体験してもらっています。これからますます増えると思われる、貧困高齢者の命を救う医者になってほしいと思っているからです。

――最後に、先生が医師として最も大切にしていることを教えてください。

森 患者さんの気持ちに沿った、オーダーメイド医療ですね。まずは、その人がどういう生き方をしたいのかということを最優先にしています。

たとえば、たばこが大好きでやめられない高齢者がいたら、無理にやめるとは言いません。ほかの医者は絶対そんなことは言わないと思いますが、「火事に気をつけて吸いなよ」と声を掛けます。

在宅介護の高齢者の訪問時には、痛いところに手を当てて、話を聞いてあげるのが第一です。そうすると、その人がどういふにしたいのかが分かるものです。薬を処方したり、塩分制限など指導したりするのは、二番目でもいいと思っています。

病気や症状を診るのではなく、その人の生き方を診るのが、私のスタイル。医師はともやりのある仕事だと感じています。